

拝啓 今年も早や10月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。近所の公園では、きんもくせいも終わり、紅葉が始まりかけました。

今回は佐生健光さんの『キリスト教と称名』の第8回です。「内村鑑三先生(3)」のところに、次のように書かれています。

「内村先生は、「人の信仰においてなしうることは、十字架を仰ぎ見ることである」と言われた。これに対し、再々述べたとおり、小西先生は、「主の御名を称える」ことを提唱された。いづれも、自分の信仰ではなく、主の贖いによって救われるための人間のなしうる方法として、これらのことを主張されたのである。

内村先生が、キリスト教の最も重要なところを明らかにされたとすれば、小西先生はその土台の上に、「どこをどう押さえれば救いを得ることができるか」を、無学の唯人に分かりやすく説かれた、ということができよう。その意味で、私は仏教浄土門における法然と親鸞の関係に似ているように思えてくるのである。」

以下は私の経験からですが、称名は、最も短い祈りであり、いつでも、どこでも称えることができる。称名以前のクリスチャンは、日曜日に教会に行き、牧師先生から話を聞いて、帰れば次の週まで聖書は開けないというのが、普通ではないでしょうか。それに引き比べ、称名のクリスチャンは、いつでも、どこでも称名しますから、強い、イエスの力(聖霊)を頂き易い。これも、やってみなければわからない教えのように思います。

10月20日、私の建設省時代からの友人の米倉安雄さんが亡くなられ、10月23日(金)銀座教会の礼拝堂で、葬儀が行われました。私に弔辞を述べるようにという大役が与えられ、お話ししました。その中の一説で次のように述べました。

「米倉さんが尊敬され今は天国にある銀座教会鶴飼勇先生、筑波学園教会の稲垣守臣(もりと)先生、単立教会の森溪川先生等の牧師先生、多くのお世話になった友人が、「長い間地上の生活をよく頑張りましたね」と言って、天国で迎えていることでしょう。私も、テモテ第2の手紙第4章にあるパウロの言葉「私は戦いを立派に戦い抜き、走るべき行程を走りつくし、信仰を守り通した。今や義の冠が私を待っているばかりだ」を、「あなたは、」と読み替えて、米倉さんに捧げたいと思います。」

昔、南原先生の坂田祐先生への弔辞、矢内原忠雄先生の金沢常雄先生への弔辞に感銘を受けたことを思い出し、読み直しました。南原先生の坂田祐先生への弔辞を読んで、涙があふれ出ました。昔、小西先生が、「キリスト教の友情は、天国に行ってからでも続くからなあ」と言われた言葉を思い出しました。

銀座教会の英会話学校キャシー・バートンルイス先生の時事英語のクラス(今学期はズーム)で先週、『小西芳之助の生涯』のアウトラインを紹介しました。原稿を同封します。

皆さまも、新型コロナに感染されないように、マスク、手洗い、うがいなどを励行されまして、お元気で毎日お過ごしくださいますように。

10月24日

山口周三

エンカウターの読者各位